

The English Progressive vs. The Japanese -teiru

Matsumura Yoshiko
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1354639>

出版情報：英語英文学論叢. 46, pp.17-31, 1996-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

進行形と～テイル形

—— 未完結と既完結 ——

松 村 瑞 子

1. 序

日本語の～テイル形と英語の進行形はほとんど同義のように取り扱われるが、実はかなり異なっており、日本語の～テイル形の用法に引きずられておきる誤りが多い。先ず、英語の進行形と日本語の～テイル形がどれ程異なるかを、それぞれの意味の記述を比較しながら、確かめてみたい。

寺村(1984)は、アスペクトとしての～テイル形は、「既然の結果が現在存在していること」という中心的意味をもち、それが次の4つの用法に分類されるとする。¹⁾

- (a) 動作や現象が継続していることを表わす場合
 - a. 赤ん坊が泣いている。
 - b. 村の人が餅をついている。
 - c. 雪が降っている。
- (b) ある過去(以前)のできごとが終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表わす場合
 - a. 金魚が死んでいる。
 - b. 筑波では、繭玉行事が始まっている。
 - c. あそこに百円玉が落ちている。
- (c) 現在での習慣を表わす用法

1) 本文中に挙げたアスペクトとしての用法のほかに、～テイル形には形容詞的用法がある。以下がその例である。

- (a) 堂々(悠々、飄々、淡々、黙々、騒然、超然、憤然、…)トシテイル
- (b) ザラザラ(ツルツル、コリコリ、アッサリ、ヒンヤリ)シテイル
- (c) ～ナ形(色、様子、顔、顔色、…)ヲシテイル(寺村(1984):143)

これらの例を誤って進行形に訳すケースは、ほとんど無いと予想されるので、ここでの議論からは外した。

- a. 父はこの頃6時頃に起きている。
- b. 父は毎朝30分程ジョギングをしている。
- (d) 過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法
 - a. その年、東京には二度大雪が降っている。
 - b. あ的那个人はたくさん小説を書いている。

Leech (1971) は英語の進行形には以下のような用法があるとする。²⁾

(a) 限定的継続

① 持続

- a. The house is falling down. (ゆるやかな動き)
(家が倒れていっている)
- a'. The house falls down. (突然の動き)
(家が倒れた!)

② 反復

- a. He was nodding. (彼は頷いていた) (繰り返しの動作)
- a'. He nodded. (彼は頷いた) (通常1回の動作)

③ 時間の枠

- a. When we arrived she was making some fresh coffee.
(私達が着いたとき彼女は新しくコーヒーを入れていた)
(継続を意味するところから、ある特定の出来事あるいは時点を
取り囲む「時間の枠」を表わす)
- a'. When we arrived she made some fresh coffee.
(私達が着くと彼女は新しくコーヒーを入れてくれた)
- b. Whenever I visit him he is mowing his lawn.
(私が訪ねて行くといつでも彼は芝刈りをしている)
(ある時点を囲む習慣)
- b'. Whenever I visit him he mows his lawn.
(私が訪ねて行くといつでも彼は芝刈りをする)

(b) 未完結

- a. The bus is stopping. (バスが止まりかけている)

2) Leech (1971) の挙げた用法、用例をここでの分類にあうように並べかえた。

- a'. The bus stops! (バスが止まった!)
 - b. The man was drowning. (その男は溺れかけていた)
 - b'. The man drowned. (その男は溺れた)
 - c. I was reading a book that evening.
(完了は示されない)
 - c'. I read a book that evening. (本を読み終えた)
- (c) 将来に予期される出来事
- a. Denis is buying me a new coat for my birthday.
 - b. We're visiting Aunt Rose tomorrow.
- (d) 一時性
- a. I am living in Wimbledon. (一時的居住)
 - a'. I live in Wimbledon. (永住)
 - b. My watch is working perfectly.
(一時的状態—私の時計は信頼できない)
 - b'. My watch works perfectly.
(永続的な状態—私の時計は信頼できる)
 - c. I'm taking dancing lessons this winter.
(一時的習慣)
 - c'. I take dancing lessons. (普通の習慣)
- (e) いらだち
- a. My father was for ever getting into trouble with law.
(父はいつも警察沙汰を起こしてばかりいた)
 - b. I'm continually forgetting people's names.
(私はしょっちゅう人の名前を忘れてる)

上記にあげた～テイル形と進行形の用法を一見しただけでわかるが、この2つの形態には、かなりの相違がみられる。その根本的相違は、大まかに言えば、～テイル形は「既完結の結果」を表すのに対し進行形では「未完結の事態」³⁾が表わされるといふ点である。この論文では、これらの形態の個々の用法を比較対照しながら、その相違について記述していく。

3) 進行形の意味・用法について、詳しくは林(松村)(1981)参照のこと。

2. 継続と限定的継続

英語でも日本語でも(a)の行為・事態の継続に関しては、それが「行為が始まった結果継続している」も「行為が未完結で継続している」も行為の継続という点では同じであるため、一見するとあまり相違がないように思える。また、実際の用例においても、(4)(5)に見られるように、進行形がそのまま～テイル形に訳されているものも見出される。

- (1) a. He was jumping up and down.
b. 彼は上下に跳んでいた。
- (2) a. What are you doing?
b. 何してるの。
- (3) a. The weather is changing for the better.
b. 天気は快方に向かっている。
- (4) a. While the allied chieftains were testing each other at Poutdam, the Empire of Japan was collapting.
(*Newsweek* July 24, 1995)
b. ポツダムで連合国の三巨頭がお互いを値踏みしている頃、大日本帝国は着実に崩壊への道を歩んでいた。(「ニューズウィーク日本版」1995 7・26)
- (5) a. In the New Mexico desert, the scientists waiting anxiously for the first test of the atom bomb were laying bets. (*Ibid.*)
b. ニューメキシコ州の砂漠では、最初の原爆実験を目前に控えた科学者が賭けに興じていた。(同上)

ところが、この一見同じ継続を表わすように思える進行形と～テイル形の用法にも相違があり、これが誤用の原因になっている。

- (6) a. He still rode and played paddle tennis at Highhold, his country estate on New York's Long Island, but suffered from insomnia and severe headaches. (*Ibid.*)
b. 乗馬やパドルテニスを楽しむ体力はあったが、不眠症とひどい頭痛に悩まされていた。(同上)

- (7) a. Stimson was privately troubled by the task. "I have rarely been connected with a paper about which I have so much doubt at the last moment," he told a friend. (*Ibid.*)
- b. この仕事を引き受けたことを、スティムソンは内心後悔していた。「自分が書いたものだということに、最後には私自身も文章の内容に疑問をもった」と、彼は友人に語っている。(同上)

日本語の場合、「不眠症とひどい頭痛に悩まされた」や「後悔した」のようにタ形を用いても許されるが、これらの事態が継続したことを示すには明らかに～テイタ形がよい。「悩まされ始めた」「後悔し始めた」結果これら事態が継続していることを、～テイタ形が表現するからである。一方、英語では、継続の意味は単純形で十分表現できる。進行形を用いると逆に、これらの事態の継続は限定的であり、いつ何時終わるかわからないという不必要な含みがでてしまう。

英語を習い始めた時、継続用法の進行形の分かりやすい用例が、まるで同義であるかのように、日本語の～テイル形に訳されながら教えられている。そのため、～テイル形と進行形は全くの同義だと理解されてしまう。ここで挙げたような、同じ継続でありながら日本語では～テイル形が用いられる所で英語では単純形が用いられるものについては、ほとんど知られておらず、日本人の英作文においても、しばしば誤りが見出される。

3. 未完結 対 既完結

日本語と英語の違いが最も顕著にあらわれるのは、日本語の用法(b)出来事完了後の結果状態と英語の用法(c)未完結の出来事の場合である。この相違は、まさしく日本語が「既完結の結果」を表わし、英語が「未完結」を表わす所からくるものである。

- (8) a. そんなことなら誰もが知っている。
b. Everyone knows it.
- (9) a. この犬は死んでいる。
b. This dog is dead.
- (10) a. 私達は去年の9月からロンドンに住んでいる。

- b. We've lived in London since last September.
- (11) a. 当時のアメリカには現代の私たちが想像する以上に厭戦気分が広がっていた。(「ニューズウィーク日本版」1995 7・26)
- b. The American public in the summer of 1945 was war-weary, far more disgruntled than we now remember.
(*Newsweek* July 24, 1995)
- (12) a. ハリー・トルーマンといえば、今では決断と良識の人というイメージが定着している。(同上)
- b. With each passing year, Harry Truman has become identified in the public mind with decisiveness and common sense. (*Ibid.*)
- (13) a. 天皇は二発目の原爆投下前に、もう降伏することを決めていた。
(同上)
- b. Emperor Hirohito had already decided to surrender before Nagasaki. (*Ibid.*)

上の例で～テイル形が用いられるのは、「知った結果の知っているという状態」や「死んだ結果の死んでいるという状態」「住み始めた結果の住んでいるという状態」「厭戦気分が広がった結果広がっていた」等を表わすためである。これらの内容は将来完結するはずだが現在は未だ完結していないような性格のものではないため、英語の進行形では表わされない。状態動詞 know, be dead, be war-weary を用いて単なる状態として表わすか、現在(または過去)完了形 have lived, have been identified, have already decided を用いて過去から現在(または過去の基準時)まで継続する状態、出来事完了後の結果状態として表わされる。

また、～テイル形(d)「過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法」も、一種の出来事完了後の結果状態と考えることができるが、未完結の事態を表わす英語では発達しようのない用法である。以下の日英語を対照した用例に示されるように、英語では進行形以外の形態で表現される。

- (14) a. 本誌の45年3月19日号も、「おそらく100万人が家を失った」として東京への空襲に喝采を送っている。
(「ニューズウィーク日本版」1995 7・26)
- b. In its March 19, 1945, issue, NEWSWEEK celebrated the fact

that “perhaps one million persons were made homeless” by LeMay’s firebombing of Tokyo. (*Newsweek* July 24, 1995)

- (15) a. 大統領にあてた7月2日付の手紙の中で、スティムソンは「適切なタイミングでの警告」を日本に与えるべきだと主張している。
(同上)
- b. On July 2 he wrote the president, urging “a carefully timed warning” to the Japanese before using the bomb. (*Ibid.*)

逆に英語進行形の(b)の用法は、日本語～テイル形を用いて表わすと全く違った事態を表現することになってしまう。

- (16) a. The train was arriving.
b. 列車はまさに到着しようとしていた。
c. 列車は到着していた。
- (17) a. The helicopter was landing.
b. ヘリコプターはまさに着陸しようとしていた。
c. ヘリコプターは着陸していた。

これら動詞は、Leech(1971)によって移行的出来事動詞(transitional event verb)とよばれ、ある状態への移行を表わすものである。例えば動いている状態から到着している状態への移行や、生きている状態から死んでいる状態への移行を表わす。そのため、これらの動詞が「未完結の事態」を意味する進行形となると、移行が未完結であるというところから、移行する前の予備段階を表現することになる。⁴⁾予備段階とは、例えば死への移行であれば「死にかけている」状態であるし、到着であれば「まさに到着しようとしている」状態となる。一方、日本語の～テイル形は「既完結の結果」を表わすため、これらの英語を～テイル形に訳した(c)文は、「到着した後の到着している状態」「着陸した後の着陸している状態」を表わしてしまうことになる。英語に近い意味とするためには、～シヨウトシテイルという完結前の予備段階を表わす表現を用いる必要が出てくる。

4) 移行的出来事動詞の進行形の用法、予備段階の定義については、林(松村)(1980)、Freed(1979)参照のこと。

実際には、この「未完結の事態」という意味はこれら移行的出来事動詞のみならず、他の動詞においても見出される。この場合の方が、単純形との差は分かりにくい。

- (18) a. I read a book that evening.
 b. I was reading a book that evening.
 (19) a. I read from 10 to 11 p.m.
 b. I was reading from 10 to 11 p.m.

Leech (1971:21) によれば、(18 a)と(18 b)の差は単純形を用いた前者ではその夜が終わらないうちに本を一冊読み終えたことを示しているのに対し、進行形を用いた後者ではこの完了という含みはない。また(19 a)では、話し手は10時に読み始め11時に読み終えたという含みがあるが、(19 b)にはその含みはない。

実際の談話においても、この未完結を表わす進行形が効果をあげているが見出される。

- (20) "I'm afraid I shall have to get on with some jobs now," she said clearly, and remained standing. He rose—had to—cursing the telephone for ringing, just when he was bringing her in so beautifully.
 (E. Taylor: "Sisters" in *Penguin Modern Stories* 6)

確固たる地位にある未亡人から、スキャンダルの多かった彼女の妹についての情報を仕入れようとしていた若い男が、「彼女をうまく騙しかけていた」時に電話がなる。未亡人は妹の話聞いて狼狽しており、最初はその男に騙されかけていたが、その電話で自信を取り戻し、彼を追い払う。この下線部で進行形の代わりに単純形が用いられれば、彼は彼女をうまく騙してしまったことになり、全く文脈にあわない。

学校文法では、進行形の中心的意味は継続であるとするところから、未完結という意味はかなり周辺的な用法として、(16)(17)のような用例のみを挙げながら記述されている。そのため、(18)~(20)に見られる未完結性という意味からくる含みには、ほとんど注意が向けられておらず、しばしば学習者の誤解を引き起こす結果となっている。「既完結の結果状態」を表わす~テイル形と「未

完結の事態」を表わす進行形の相違については、もう少し注意が向けられる必要があると思う。

4. 未来を表わす進行形

Leech(1971)の挙げる英語の進行形の用法(c)は、近接未来を表わすといわれている進行形である。もちろん、この用法は進行形が「未完結の事態」を表現するために「その時点は未完結であるが将来完結することが予期される」という所から発達したものである。⁵⁾これに対し「完結後の結果状態」を表わす日本語の～テイル形では、この用法は発達しようがない。以下の例にも見られるように、未来を表わす進行形を～テイル形にすると全く違った意味になってしまう。

- (21) a. She's getting married this spring.
 b. 彼女はこの春結婚することになっている。
 c. 彼女はこの春結婚している。(未来の意味にはならない)
- (22) a. Next they're playing the Schubert Octet.
 b. 次にシューベルトの8重奏曲を演奏します。
 c. 次にシューベルトの8重奏曲を演奏しています。
 (未来の意味にはならない)
- (23) a. But every walk seemed like a bit of the last walk they would have together, for soon Mary was going away.
 She was really going to college, that fall. They had looked forward so long to her going, but now when she really was going, it did not seem possible.
 (L.I. Wilder: *Little Town on the Prairie*)
 b. すぐにメアリーは行ってしまうことになっている。
 c. すぐにメアリーは行っている。(未来の意味にはならない)

この未来を表わす進行形は、他の未来を表わす表現と比べて特に「計画・取り決め」による未来を表現する。上の例においても、「結婚の取り決め」「予

5) 未来を表わす進行形についての詳細は、林(松村)(1980)参照のこと。

め計画されたプログラム」「大学に行けることが決まっている」と、計画・取り決めによる未来が表現される。この計画・取り決めは必ずしも意志と一致する訳ではないため、Leech (1971) によると、この進行形は人からの誘いを婉曲に断る時によく用いられる。(24)では「話者自身はビリヤードをしたいが、メアリーを連れ出すという約束が既にあるのでできない」と婉曲に誘いを断わるのに、この進行形が使われている。

- (24) I'm sorry, I'd like to have a game of billiards with you, but I'm taking Mary out for dinner. (Leech(1971) : 58)

未来を表わす表現のうち、日英語がかなり相違しているのは動詞動詞 (= 非状態動詞) の場合である。日本語では確定的な未来を表わす最も一般的な表現はル形である。一方英語では、現在形が未来を表わす場合はかなり限定されている。

- (25) 市長と秘書は目黒のホテルに泊まる。
 (26) 市長は私用で二日遅れる。
 (27) 今晚駅前の広場で盆踊りがあります。(25)~(27) : 寺村 (1984) : 98
 (28) Next Christmas falls on a Thursday.
 (29) The term starts on 23rd April.
 (30) The train leaves at 7.30 this evening.
 (31) I get a lump sum when I retire at sixty-five.
 (32) a. We start for Istanbul tonight.
 b. We are starting for Istanbul tonight.

(28)~(32) : Leech(1971) : 65-6)

Leech(1971)は、上の例を挙げながら、単純現在形が未来を表わすのは「事実としての未来」や「変更不可能とみなされる計画・取り決め」の場合であると述べる。そのため、進行形を用いた(32 b)ではあるいは後で変更されるかもしれない現在の計画を発表しているのに対し、単純現在形を用いた(32 a)は有標の未来であり、計画変更は問題外の、非個人的なもの、集団的なもの(例えば、委員会、法廷、あるいは名を秘したある権威)によってなされたものと感じられるという。

この英語の単純現在形の表わす未来の有標性に気付かず、日本語のル形をそのまま英語の単純現在形に訳したために、奇妙な英文を作ってしまった例は非常に多い。英語では未来を表わす単純現在形が、日本語とは違って、有標の形式であることに注意を向ければ、この誤りはかなり少なくなるのではないかと思う。

5. 一時性

日本語の用法(c)と英語の用法(d)の習慣を表わす場合は、どちらも習慣を表わすという点は同じであるため、特に誤解されやすい。

- (33) a. I teach English at this school.
 b. I am teaching English at this school.
 c. 私はこの学校で英語を教えています。
 d. 私は今はこの学校で英語を教えています。
- (34) a. I work in this office,
 b. I am working in this office.
 c. 私はこの会社に勤めています。
 d. 私は今はこの会社に勤めています。

英語では永続的な習慣を表わす場合単純現在形を用いる。進行形になるのは現在時に限定される一時的習慣の場合である。これは、進行形が未完結を意味するため、習慣ではあるがいつかは終わるという含みを出すためだと考えられる。一方、日本語では永続的であろうと一時的であろうと習慣には～テイル形を使うのが普通である。大江(1982:31)は、「日本語の行為動詞では「私は車を運転する」「彼は英語を話す」のような能力を表わす場合にのみ～テイルをとらない習慣的現在になるのであり、他の習慣的行為を表わす場合～テイルを必要とする」と述べる。そのため、日本語を英語にする際に永続的習慣には進行形を使わないことに注意することが特に必要になってくる。また逆に、英語を日本語にする場合、英語の進行形のもつ一時性をだすためには(33d)(34d)にみられるように「今は」等の時点を明示する副詞が必要となる。

状態動詞は進行形にはならないという記述がどの文法の本にも見出される。

しかし、状態においても、一時性の含みを出すためには進行形が用いられる。一方、習慣を表わす場合と同様、～テイル形にはその含みはない。

- (35) Richard Skate had taken a couple of hours away from the Ministry to see whether his house was still standing after the previous night's raid. (G. Greene: "Men at Work" in *Twenty-One Stories*)
- (36) At last she was safe through the fence and risen up out in the clearing. Big dead trees, like black men with one arm, were standing in the purple stalks of the withered cotton field. There sat a buzzard. (E. Welty: "A Worn Path" in *A Curtain of Green*)

「家が立っている」という状態は、通常は永続すると考えられており進行形にはなりにくい。ところが、(35)で進行形が用いられているのは、戦時下における空襲の後という特別の状況であるため、「家が立っている」という状態もいつ終わるかどうかわからない一時的な状態とみなされているためである。

(36)は、進行形と単純形の用法が一般的常識からすると逆転しており興味深い。一般的常識からすると、「木が立っている」のは永続的状态であるため単純形が用いられ「鳥が木に止まっている」のは一時的状態であるため進行形が用いられると予測される。ところが、ここでは同じ stand が前者では進行形で後者では単純形で表現されているのである。この小節は、自分の孫の病気を治す薬を町まで買いに行こうと、人っこ一人通らない道程を一人で、息も絶え絶えになって進んでいる老婆の姿を描くものである。筆者にとって描かねばならぬ存在は、老婆が死なば餌食にとじっと木に止まっているノスリである。2本の木が立っている状態はその背景にすぎない。この状況では、いつ倒れてしまうかも知れぬ死んだ木々に対して、ノスリの存在こそ変わらず持続するものとして表現することで、その存在感を出しているのだと考えられる。

また、この状態動詞の進行形が一時性を含ませるところから、それを丁寧さを出すために利用した用法が、英語では発達している。

- (37) "I was thinking if, if we got home now, I could help Ma with supper," Helen said. She touched her father's arm as if to waken him. "It's real hot, she'd like some help." (J.C. Oates: "By the River")

下線部は、何か月も家出をして、父母に迷惑をかけたことに対し非常にすまない気持ちであり、自分を再び家に入れて貰えばと、すがるような気持ちで父親に頼む娘へレンの言葉である。ここでは過去進行形を用いることで、現在そういう気持ちがあるかどうかには全く言質を与えず、「過去に一時的にそう思っていた」ということで、婉曲に今も母親を手伝いたいと思っていることを表わしているのである。

もう一つ、習慣を表わすといわれている進行形の中に「いらだちの進行形」と言われているものがある。

(38) My father was for ever getting into trouble with the law.

(39) I'm continually forgetting people's names.

(40) I know a man who's always giving his wife expensive presents.

(38)～(40) : Leech (1971) : 33

これらの進行形が他の習慣を表わす進行形と異なるのは、これらはほとんどいつも *forever*, *always*, *continually* のような副詞を伴い、通常は習慣にはならないような事態が (例えば(38)「警察ざたになる」や(39)「人の名前を忘れる」) 習慣化していることを述べることが多い。また、(40)については単純形も起りうるが、単純形は「夫が妻に普通プレゼントを贈るあらゆる機会に」という意味であるのに対し、進行形が用いられると、「この男が妻に高いプレゼントを贈らないことはない」というような意味になる。これは話者が本来なら一回で終わるべき出来事であると考えている事態が、繰り返し未完結に続く所からくる含みであると考えられる。

6. 結語

日本語の～テイル形と英語の進行形は、行為や事象の継続を表わす場合には類似しているが、その他の場合は全く異なっている。誤解をなくすためには、ここで述べたように、日本語の～テイル形は「既完結の事態の結果状態」を表わすのに対し、英語の進行形は「未完結の事態」を表わすという根本的相違に注意を向け、それを用いて個々の用法の違いについて説明するのがよい。

参考文献

- Dowty, David Roach. 1972. *Studies in Logic of Verb Aspect and Time Reference in English*. Doctoral Dissertation, University of Texas at Austin.
- Freed, Alice. 1979. *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Dordrecht: Reidel.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell U.P.
- 林（松村）瑞子. 1980. 「進行形の非進行的用法について」『九州大学大学院英語英文学研究会 cairn』No.24 : 15-32.
- 林（松村）瑞子. 1981. 「進行形の意味と用法について」『九州大学大学院英語英文学研究会 cairn』No.25 : 113-29.
- 大江三郎. 1982. 『講座・学校英文法の基礎 第4巻 動詞（I）』東京：研究社.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味』東京：くろしお出版.